

# 近代における韓国と日本の放鷹を介した文化交流 - 『高麗古本鷹鵠方』を手掛かりにして -

二本松泰子\*

nihonmatsu.yasuko@u-nagano.ac.jp

## <目次>

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1. はじめに         | 4. 『高麗古本鷹鵠方』の鷹賦と鷹詩 |
| 2. 『高麗古本鷹鵠方』の伝本 | 5. おわりに            |
| 3. 『高麗古本鷹鵠方』の概要 |                    |

主題語: 鷹狩り文化(Falconry culture)、鷹鵠方(Yo-kotsu-ho)、古今事文類聚(Kokonjibunruiju)、李秉韶(Li Bingshao)、多田正知(Masatomo Tada)

## 1. はじめに

稿者は本誌第71輯において、「韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159古朝68-41(朝68-41))全文紹介-前近代・近代における朝鮮と日本の放鷹文化交流-」<sup>1)</sup>(以下「前稿」と称する)と題して、韓国内において高麗時代に成立したとされる鷹狩りの伝書(=鷹書)について取り上げ、その全文を紹介した。ただし、前稿では、同書の全文を紹介することに主眼を据えてしまったため、研究上においていくつかの課題が残るに至った。具体的には、その内容に関する詳しい分析をするまでに至らなかったこと、また、同書は1930年代になると日本人から積極的な関心を寄せられていた(後述)ことについて言及できなかったことが挙げられる。

さて、当該伝本は、14世紀の高麗忠恵王時代の李兆年(後述)の著書とされる『高麗古本鷹鵠方』の新出写本である。前近代の朝鮮半島において成立した鷹狩りの伝書は、管見において三種類存在した<sup>2)</sup>。その中で当該の『高麗古本鷹鵠方』のみ、唯一、日本国内に伝来した

\* 長野県立大学 グローバルマネジメント学部 教授

1) 二本松泰子(2021)「日本近代学術研究」第71輯、韓国日本近代学術會

2) 管見において確認できたのは以下の三種類である。

① 李兆年著『高麗古本鷹鵠方』(14世紀成立)

テキストが現存していない<sup>3)</sup>。しかし、寛永13年(1636)度の朝鮮通信使の副使である金東溟の日誌(『海槎録』)によると、日本の儒者である林羅山が『鷹鵠方』を以て問いかけると、金東溟はそれが「李兆年」の著であることを回答した記載が見える<sup>4)</sup>。このことから、江戸時代前期の日本では、李兆年の『鷹鵠方』(=『高麗古本鷹鵠方』)の存在が一部の儒者の間では知られていたことが窺えよう。にもかかわらず、同書の伝本がそれ以上日本国内で広まることがなかったのは、当時は“日本人受けする”テキストと見做されなかったためであろうか。ただ、そのような状況が近代になると一変し、『高麗古本鷹鵠方』について日本人が積極的に興味を示す事例が確認される(後述)。ちなみに、近代において日本人が関心を寄せた朝鮮の鷹書は唯一同書のみであった。それならば、同書にまつわる事象は、韓国と日本における放鷹文化交流史上、近代に独自の様相を展開していたことを伺わせる証左として重要であろう。

そこで、本稿では、『高麗古本鷹鵠方』について再度取り上げ、その叙述内容に踏み込んだ考察を試みる。それによって、近代における数少ない韓国と日本の間の放鷹を介した文化交流の事例としての同書をめぐる具体相を明らかにし、両国の放鷹文化交流史の体系を構築するために必要な基礎情報の確認を目指す。

## 2. 『高麗古本鷹鵠方』の伝本

前稿では、『高麗古本鷹鵠方』の伝本について以下の三本が現存することを紹介した。

- ① 韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))
- ② 韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)
- ③ ソウル大学校奎章閣所蔵『鷹鵠方』(古615-135 Y58m)

このうち、稿者が前稿で新出の写本として紹介したのは①である。②と③については後日再調査したところ、同一のものであることが判明した。より厳密にいうと、ソウル大学

② 李瑑著『古本鷹鵠方』(15世紀成立)

③ 李燭著『新增鷹鵠方』(16世紀成立)

3) 注1に同じ。

4) 三木栄(1956)『朝鮮医書誌』学術図書刊行会、279頁、田川孝三(1964初版、1973新装復刻)『李王朝貢納制の研究』東洋文庫刊、210頁-211頁、三保忠夫(2016)『鷹書の研究—宮内庁書陵部蔵本を中心に(下冊)』和泉書院、1762頁-1763頁など。

校奎章閣で所蔵されていたもの(③)が移行して、韓国国立中央図書館の所蔵(②)になったらいい。このことから、現段階の管見において確認できる同書の伝本は2種類ということになる。なお、②③の写本についてはその表記を統一して上記②の韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)と示すこととする。

さて、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))と韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)の本文を比較すると、前半はおおむね一致する叙述となっている。しかし、後半に見える本文については一部において異同がある(後述)。さらに後者のテキストの末尾に見える奥書は同本独自の言説で、前者のテキストには記載されていない。以下にその奥書を全文掲出する。

此鷹鵠方一篇即高麗李兆年所著作而安嶺 / 菴鼎福珍藏于家今入テ總督府書庫考也 / 昭和五年秋文學士多田正知君欲翻贖此書 / 議及於余 / 與君交雖淺而情已深故不敢孤 / 其托照眼昏手戰字劃不成様良可愧也歲庚 / 午之小春日延安李秉韶書 /

右掲の末尾に見える署名によると、このテキストは昭和5年(1930年)に「李秉韶」という人物が書写したものであったことが判明する。李秉韶とは、大韓帝国の元宮内府(李王家の家政を所掌する機関)秘書院丞を務めていた人物である。よく知られている彼のキャリアとしては、1922年から1925年までは朝鮮総督府が制定した朝鮮史編纂委員会の委員であったこと、1925年以降は同委員会を拡大強化させた朝鮮史編修会の委員を務めていたことが挙げられる他、1934年に編集された『朝鮮王朝実録』の最後の二巻(『高宗実録』と『純宗実録』)の編纂委員会を構成する編纂補助委員も務めていたことが挙げられる。その李秉韶が書いたとおぼしき右掲の奥書によると、この書物(「鷹鵠方一篇」)は高麗時代の官僚である李兆年の著作で、李王朝の英祖・正祖時代の学者である安鼎福(1712年~1791年)の家に所蔵された後、現在は総督府書庫にあると説明されている。このように、同本が総督府書庫にあることを李秉韶が認識していたのは、先述した朝鮮史編修会が朝鮮総督府直轄の史料編纂機関であったためであろう。ちなみに、李兆年は字を元老、諡号を文烈と称し、第二十八代高麗王の忠恵王(1315年~1344年)に仕えた。高麗王朝末期の政治家として著名な李仁任は彼の息子である。李仁任は、第三十二代高麗王の王禑を擁立して権勢を誇ったものの、李成桂(李氏朝鮮初代国王)たちによって京山府(現在の大韓民国慶尚北道)に配流されたという。また、安鼎福とは、朝鮮の歴史書である『東史綱目』などの著作で知られる歴史学者で、正祖の教育係を務めた宮廷学者でもある。

さらに、右掲の奥書によると、昭和5年の「庚午」(=10月)には「文學士多田正知君」が、当該伝本の翻謄を希望したことが見え、李秉韶は友情の深さにかけてその希望を叶えたいと記載している。この多田正知とは、1930年代に京城帝国大学で教員をしていた在朝日本人で、朝鮮文学の研究者であった<sup>5)</sup>。この奥書に見える情報により、1930年代頃において同書は朝鮮総督府の書庫に所蔵され、在朝の日本人に関心を寄せられていたことが判明する。

ちなみに、李秉韶が書写した李兆年『鷹鵠方』の伝本は、金信根編『韓国科学技術史資料大系 医薬篇50』(1988年11月、驪江出版社)にその影印が所収されていることはすでに知られている。ただし、その具体的な叙述内容はまったく明らかとされていない。そこで、次節では、まず同書の概要から確認してみることにする。

### 3. 『高麗古本鷹鵠方』の概要

李兆年著『高麗古本鷹鵠方』の内容は以下の9項目から構成されている。

- ① 鷹色篇(論形體、論觜喙、論足、論羽色、論羽名、論天質、飼食、養馴、教習、調放後雜理式、平安氣候、不安之候附治療方、鼓鼻也証、瘦鷹上肥法、劑藥法)
- ② 鷹賦
- ③ 鷹體作詩
- ④ 放鷹詩
- ⑤ 養鷹詩
- ⑥ 畫鷹詩
- ⑦ 詠鷹詩
- ⑧ 架上鷹絶句
- ⑨ 沔川居韓進士状

ところで、『高麗古本鷹鵠方』以外にも、前近代の朝鮮で成立した鷹書は管見において以下の二書が現存する。

(あ) 李瑢著『古本鷹鵠方』(15世紀成立)

5) 李曉辰(2013)「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰」『東アジア文化研究科院生論集』第1巻、関西大学ほか。

## (イ) 李燭著『新增鷹鵠方』(16世紀成立)

上記の(あ)『古本鷹鵠方』の著者とされる李瑬(1418年~1453年)は、李氏朝鮮第四代国王世宗の第三王子で第五代国王文宗、および第七代国王世祖の弟である。生前には安平大君と称した他、清之、匪懈堂、琅玕居士、梅竹軒といった字や号を有している。学芸を好む書家でもあった<sup>6)</sup>。1453年に首陽大君(のちの世祖)から謀叛を起こした黒幕とされ、江華島(現在の大韓民国仁川広域市江華郡)に流刑された(癸酉靖難)。その後喬桐島(現在の大韓民国仁川広域市江華郡喬桐面)に移ってから賜死されたという。

同じく上記の(い)『新增鷹鵠方』の著者とされる李燭は、朝鮮王朝で国務を執行する六つの中央官府(六曹)の一つである礼曹や同じく朝鮮王朝の行政機関である芸文館などに勤めた役人である<sup>7)</sup>。官職は正郎で李氏朝鮮第13代国王の明宗が即位した1545年の乙巳士禍に巻き込まれて慶興(現在の朝鮮民主主義人民共和国慶興郡)に配流された<sup>8)</sup>。『新增鷹鵠方』はその流謫地で著されたものとされる。

これらの二書に見える叙述と『高麗古本鷹鵠方』のそれを比較すると、①「鷹色篇」の「瘦鷹上肥法」「劑藥法」において一部重複する内容が見られ、さらには②「鷹賦」については三書とも完全に一致した文言が確認できる<sup>9)</sup>。このうち、『高麗古本鷹鵠方』①「鷹色篇」について、その内容を大まかにまとめると、鷹の頭の形や嘴の様子・足の色などといった体つきに関する説明、同じく鷹の羽の色の種類についての説明、鷹の性質についての説明、鷹の餌となる動物の種類やその良し悪しの説明、鷹を山野で訓練する方法についての説明、鷹の種類ごとに狩りの獲物が異なることについての説明、放鷹後の鷹の扱い方の説明、鷹の排泄についての説明、鷹が不調なときのさまざまな治療法やその一環としての鍼灸についての説明、鷹の瘦身や肥満についての説明、鷹に処方する薬の調合法についての説明などが詳しく記載されている。なお、こういった鷹を扱う際に必要な実技的な知識に関する記述の一部(「瘦鷹上肥法」「劑藥法」に相当する項目)については『古本鷹鵠方』『新增鷹鵠方』の二書と類似した内容が確認される<sup>10)</sup>。しかし、その他の鷹に関する実技的な知識については、三書ともそれぞれ異なった内容が記載されている。

先述のように『高麗古本鷹鵠方』『古本鷹鵠方』『新增鷹鵠方』のすべてに一致する文言で引

6) 注4の田川著書207頁、同三保著書1761頁など。

7) 注4の三木著書329頁、同三保著書1761頁など。

8) 注4の三保著書1761頁など。

9) 二本松泰子(2021)「日本における朝鮮放鷹文化の享受と展開—『新增鷹鵠方』の伝播をめぐって—」『伝承文学研究』第70号、伝承文学研究会

10) 注9に同じ。

用されている「鷹賦」は、北齊～隋の時代において活躍した学者・官僚である魏澹(字は彦深)の著とされる詩賦で、唐代初期に成立した『初学記』や宋代の『太平御覧』といった類書に引用されている(後述)。いずれにしても、この鷹賦は、三書すべてに掲載されていることから、高麗・朝鮮の鷹書に共通して欠くことのできない必須の文言であることは指摘できよう<sup>11)</sup>。その一方で、本稿が目指したいのは、この鷹賦が掲載されているテキスト内での位置がそれぞれ相違している点である。すなわち、『高麗古本鷹鵠方』は、同書において二つ目の項目に掲載されているが、『古本鷹鵠方』はテキストの最末尾に見え、『新增鷹鵠方』では冒頭に記載されている。また、『高麗古本鷹鵠方』では、②鷹賦が叙述された後に③鷹體作詩、④放鷹詩、⑤養鷹詩、⑥畫鷹詩、⑦詠鷹詩、⑧架上鷹絶句という鷹詩を記載する項目が続くが、『古本鷹鵠方』『新增鷹鵠方』は両書とも魏澹の鷹賦以外には詩賦の体裁を持つ叙述は見えない。それに対して、『高麗古本鷹鵠方』のみ、鷹賦に連続する複数の詩と併せてひとまとまりの叙述群となっているのである。『古本鷹鵠方』『新增鷹鵠方』では共通して冒頭や末尾に配置されて鷹賦の叙述だけで独立した項目のように扱われていることと比較して、明らかに異質な叙述構成と言えよう。そこで、次節では、こういった『高麗古本鷹鵠方』において独自の展開を見せる鷹賦と鷹詩について取り上げ、その文言に関する分析を手掛かりに当該テキストの特性を明らかにしてゆくことにする。

ところで、『高麗古本鷹鵠方』に見える⑨「沔川居韓進士状」の本文は、前稿で紹介した韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))の該当本文と比較するとかなり異同が見える。これは、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(貴159 古朝68-41(朝68-41))の伝本の方に錯簡があることに所以すると推測されることから、以下に韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)の該当本文を掲出する。

沔川居韓進士状 /

右謹言所志矣段隴西接前翰林李太白亦其矣祖 / 上傳來使用為如乎婢詩今及一所生婢墨德二所 / 生婢筆今三所生奴紙筒等四口乙被謫多年愁火 / 焦肝忿不喻華陰縣逢辱以後日漸增恨五藏枯旱 / 為塗餘良謫所窮困年老益深醜酒難繼乙仍于放 / 賣計料是如浣花居工部侍郎杜子美教是槐安國 / 睡鄉北面邯鄲路中適逢說道為良去乙天寶十三 / 年秋八月下相約二夜至相對論議矣家藏五花馬 / 千金裘等物以論價依數奉為白遣同翰林自筆 / 成給為白良去乙已曾所居隴西郡段路遠萬里歸 / 到不得時居夜郎官斜出使用為族其等徒相當所 / 任定体則詩今段本心無邪天性雅魯既以仙風道 / 骨之人以長在宇宙之間少無裏老之態日以感發 / 善心為事上典向為良忠誠至極其矣同類奴千篇 /

11) 注9)と同じ。

萬首等招致同居朝採萬物之英華夕才廉天理之骨 / 月曳羅列供給為白齋墨德段様子沙黒色縛面為白 / 良置天性方正夙志風烟磨頂放踵盡情妓主其心 / 可嘉為白沙乙餘良其子妣々日梅月清香等不知 / 其教為白齋華今段本性聰敏才技豪逸凡古今萬 / 物之理乙平生不忘上典向為良日事左右湏曳不 / 離其子孫尖頭黒髮白額黄鬚者妣々為白齋紙筒 / 段外面純白為良置天性輕薄曲隨人意染人誘言 / 乙仍于其息奴擣鍊奴壯紙奴注紙等及同年婢華 / 今墨德并以招引潛隱逃躲為白良去乙推尋不得 / 為有在乎同詩今所告内湖西各官養之人等婢矣 / 子息等乙招引兵營城内時方居生是如進告為白 / 昆如此仁政之下右良縁細々鑑當推尋次以立案 / 成給為只為 /

行下云々兵使李大信前呈狀題只音内上項奴婢 / 乙謫仙良中實為買得夜郎官斜出則采石江月以 / 立證不名為盜餘良高適杜甫本無同歸夜郎之語 / 瓮不喻杜甫長懷李太白曰不見李生久佯狂真可 / 爰云則明知無於是去檠夜郎官偽造判然取實不 / 得是盜餘良營段懸筆今墨德雲孫等戈只背主逃 / 亡已有多年追捕不得方懷憫慮為 果同詩今押 / 來次以奴壯紙雲孫等先可報道為去乎相考施行 /

右掲の記述は、項目名通り沔川郡(現在の大韓民国忠清南道の唐津市)に居住する進士(官吏)の書状である。これによると、たとえば、李白と彼の出身である地隴西郡(現在の中華人民共和国甘肅省東南部)についての文言が見えるなど、盛唐時代の詩人である李白や杜甫に言及した叙述が確認できる。このように、⑨「沔川居韓進士状」には、中国最大の詩人である李杜に関わる言説をはじめとして、多少なりとも詩賦と連動した叙述であることが確認できよう。

### 4. 『高麗古本鷹鵠方』の鷹賦と鷹詩

まずは、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)の②鷹賦、③鷹體作詩、④放鷹詩、⑤養鷹詩、⑥畫鷹詩、⑦詠鷹詩、⑧架上鷹絶句の本文を以下に掲出する(※②~⑧が連続する叙述構成となっていることわかりやすく提示するため、改行は示さない)。

鷹賦	惟茲禽之化育 寶鐘山之所生	資金方之猛氣 種火德之炎精	何寒者之多端 運機羅之綱束	綴經絲於双輪 結長繩於兩足	飛不遂於本情 食不口於情欲	逸翰由而暫歇 雄心為之自屈	若乃	貌非不一 相乃多途	指重十字 尾貴舍籠	立如植木 坐似愁胡	背同鉤利 脚等霜粘			
亦有	白如散花 赤如點血	大文若細 斑似錦纈	眼類明珠毛猶 霧雪爪剛如鉄	身重若雲 爪剛如鉄	或復	頂平如削 頭圓如卵	臆筋潤頭 長龜頭短	趨厚羽輕 體寬肉緩	求之使用 俱為絶伴	或如鸚頭 或如鸚頭	赤轄細骨 黄足小肚	懶而易輕 奸而難誘	住不可呼 飛不急走	若此之輩 不知不有
若夫	疾食速消 此如有令	鷹頭竊立 是為無病	扇門忌大 結肚惡軟	條不飲絶 喉不直喘	生於居者則好巢 於木者則常立	双散長者起遲 六翮短者飛急	毛衣層攷 厥色無常	定撥生必 就號為黄	二周作鴻 千白成蒼	雖曰排籠 性殊衆鳥	雖則體大 小腹則小	遇得大則驚 視人則剛視	養雛則小病 野羅則多巧	
察之為易 調之實難	格必鳥室 必華迫寬	姜以取熟 汝以排寒	轉頂温暖 肉不陳乾	静之使安 静之使安	書不離乎 夜不火宿	微如其毛 小減其肉	肌肥體瘦 心和性熟	望斬雲霄 志在馳逐	鷹體作詩	大鷹頭足小 項長大目圓	厥形上寬大 高昏温瘦長	下失扇尾短 胸寬體亦重	定羽持羽翼 鮮翼短而廣	
小鷹頭足大 項短目大圓	尾具舍籠炎 坐子指瘦長	目圓内捷坐 子如聽深足	形体苟若此 鷹能大小同	鷹壯月鷹出籠 枯堆兔肥	下轉顧百鄉 無甜指一遺	鷹趨疾如風 鷹爪利如鎌	本為鳥所說 今為人所賞	孰難使了愁 有術世易知	取則向背性 制在則飽時	不可使長飽 不可使長飢	飽則力不足 飽則背人飛	乘航縱來飽頭 持搏擊繁雜		
所以爪翅切 而人生奴之	聖明取英雄 其術亦如斯	鄙語不可棄 吾聞諸獵師	養鷹詩	養鷹非玩形 所資擊難力	少年昧其理 日・哺不息	探難朝昏細 黃口有餘力	宿知下轉時 翅毛不飛得	口覆上林表 狡兔自南北	飲啄既已盈 安能勞羽翼	畫鷹詩	素練風霜起 蒼鷹畫作殊			

攫身思狡兔 縫旋光射獵 何當擊凡鳥 詠鷹詩 星眸未落警秋頻 会使老奉供口服 穿雲自力飛如電 何惜忍向人啄肌 天上鷹絕句 天憑心膽架頭身  
 側目似愁胡 勢雄擒可呼 毛羽誰平蕪 擊金給伏雪毫毛 莫碎親手吸腥臊 慙免誰知啄勝刀 寒日蒼翎碧絲條 欲擬飛騰未有因  
 萬里碧翬一去終不 知誰是鮮一去條人

以上のように、同書の②~⑧はすべて割注の体裁で訓詁の文言が記載されている。なお、②においては賦の中の文言の一部を割注ではなく本文様に記載し、③~⑧については、詩題に該当する文言のみが割注となっていない。このような②~⑧に記載されている叙述内容は以下の通りである<sup>12)</sup>。

②鷹賦【著者は魏澹】=鷹は鍾山で生まれ育ち、金方(=西方)の猛気を受けて生まれ、南方の火の徳の炎の精気をほしいままに集めて鷹となる。(このように平凡な鳥と比べものにならない)鷹であるが、山・沢をつかさどる虞者(=役人)に捕えられて糸で脛を縫われ、長い縄を足に結び付けられると、飛ぶと言っても心の赴くままには遂げられず、餌を食べるとしても心の欲するままに腹を満たすことはできず、優れた翼をおさめ、雄心を狭めてゆく。また、鷹の貌は皆一様で、その相はいろいろある。すなわち、四つの指は十文字のようなものを重ね、尾は合盧を尊ぶ。留まっている姿は植木の如くまっすぐ立ち、愁胡のように遠いところを望み、觜は鉤のように鋭く、脚は荒くて荊が枯れたようで、白毛は白い花が散ったように、赤毛は赤い血を点じたようにするのが良いとする。大きな紋は錦紋のように細かな斑は織(=絞り染め)に似ている。目の光は明るく玉に似て、毛の白いのは霜雪のようである。拳に据えたときは重くして金のようで爪の強いのは鉄のようである。頭の上は平に削ったようである。総じて頭の形は丸くて卵のようである。胸は広く首は長く筋は荒く脛は短く、翅は厚く羽は強く脾寛(=胃袋)がゆるくて餌を多く食べさせてもよい。このような鷹は才用(人智)があるようなものなので、他の同類とは違って優れた逸物である。或いは鶉の頭のような鷹、或いは鴟(=トビ)の首に似ている鷹がいる。あるいは、赤い眼に黄色い脚に骨が細く臂のつがい小さく、無精でものに驚きやすく魂が悪い鷹は導き難い。また、居かかり住んで呼んでも来ず、また飛んでも遅くて人が走るのにも及ばないくらい遅い鷹もいる。このような鷹は非才なものなので用いず、その存在を無きがごとくにする。もし餌をよく食べて消化するのが早い鷹がいれば長命である。鴛(おしどり)の首のようにそそり立つ鷹がいれば無病である。鷹の肛門が大きいのは忌むべきである。鷹の結肚(=下腹の近い部位?)が柔らかいのも病気である。鷹が縊(=足をつなぐ紐)を絶って離れたがるのは悪い癖で背中息遣いがうるさく見えるのは悪い症状である。岩窟にかけられた巢で生まれた鷹は眠ることを好み、木にかけられた巢で生まれた鷹は常に

12) 魏澹の鷹賦の解釈については、注9の拙稿においてすでに紹介済みである。併せて参照されたい。

立っていることを好む。双方の足の脛が長い鷹は飛び起きるのが遅い。鷹の六翮(=片翼に六、七枚ずつある長い羽)が短いと飛ぶことが早く鋭い。鷹の羽毛は季節によって改まるのでその色は常に同じではなく変わるものである。鷹は寅に生まれて酉に就く(寅の刻、酉の刻について述べたものか)。総じて鷹を黄(若鷹のことか?)という。生まれてから二年の鷹の羽色は鶉で、生まれてから千日経ったの鷹の羽色は蒼である。排盧という鷹でもその天性は並みの鳥とは異なるものである。鷹の雌は体が大きく雄は小さい。鷹は犬を見ると驚き猜み、人を見るとよく馴れるものである。雛鷹を養うのは難しいものではあるけれども病気は小さいのでそれほどではなく野鷹の方が多く技巧を要して難しい。鷹の善悪を察することは易しく、それを調べることは難しい。架(=鷹が留まる棒)は高く地面からめぐらし、鷹部屋は必ず華やかに寛げるようにせよ。生姜は熱をとるため、酒は寒さを排するために用いる。鞞(=たかたぬき。鷹を留まらせるためにはめる革製の手袋)は温めておくべきで乾肉は鷹に与えてはいけない。鷹に近づいてなつくようにしたり、物静かにして鷹の心やすいようにして使うべきである。昼は手を離さずに据えるようにして、夜は寒いので鳥屋の辺りに火を起こすべきである。鷹の餌に羽毛が加わると鷹の肉は減少して痩せる。これまで述べた通りに正しく養うと鷹の肉は肥えて腸は痩せ、鷹の心は温和になって鷹が天性持っている靈妙も優れてゆく。以上のように飼養することができれば鷹はよく馴れて雲霄に逃げようとする念は絶え、鳥を馳逐する志を持つ逸物になる。

③鷹體作詩【著者未詳】=大鷹は頭や足が小さく首が長く目が大きく丸く、上半身(胸部)が広く、背が痩せて長く、下半身は尾が短く翼の羽は少なく短い。小鷹は頭や足が大きく首が短く目が大きく丸く、尾の具合は炎のようで指は痩せて長く、目は丸い鵲のようである。体の形態はいやしくも鷹ならば大小は同じである。

④放鷹詩【著者は白居易(唐代の詩人)】=十月に鷹が籠を出ると、草は枯れて雉や兔が肥え太っている。鷹は、鞞を下げた人間の指示に従い、百度投げても一度として取り遺すことはない。鷹の飛翔が疾いことは風のように、鷹の爪が鋭いことは錐のようである。それは、本来、鳥のために設けられた羽爪であるが、今は人に利益を与えるものとなっている。誰が鷹をこの様に仕込んだのだるか、鷹を使った狩りの術を甚だ知り易いものとしたのだろうか。鷹が従ったり反抗する性質を熟知して、飢えと飽食の時を制御すべきである。長く飽食させてはいけなし、長く飢えさせてもいけない。鷹が飢えると飛ぶ力が不足し、飽食すると人の指示に背いて飛ぶようになる。鷹が飢えている時に乗じて襲いかかるのを許して、まだ飽食しない内に繋ぐべきである。鷹の爪羽による(狩りの)功績を、こうして人は坐ったままで収める。聖明の王が英雄を思い通りに動かすように、その鷹の術

もやはりこのようなものである。(こういった鷹術に関する言葉を)卑賤の言葉として棄てるべきでない。私は此の極意を獵師から聞いたのである。

⑤養鷹詩【著者は劉禹錫(唐代の政治家)】=(鷹を扱うのは)遊びではなく、(鷹の)新鮮な力に資するべきである。少年は無知であるため、毎日餌を与える。雛の黄色い口を探ると、日暮れには余った餌がある。鞆を下げると羽が重くなって鷹が飛べなくなる。北と南から狡い兎を止めて、飲み物を満たし、よく(鷹の)羽翼を労わるべきである。

⑥畫鷹詩【著者は杜甫(唐代の詩人)】=白絹に風霜が起こっているように見えるのは、それに描かれている蒼鷹の勢いのせいである。身をそばだてている狡い兎を追い、目をそばだてた(鷹の)様子は愁いている胡人に似ている。足にはめられた鎖は光り、いままきに軒から飛び出さんばかりである。(鷹は)いつか必ず凡鳥を撃って、その羽や血を荒野に飛び散らせるに違いない。

⑦詠鷹詩【著者は章孝標(唐代の詩人)】=(鷹の)星のような目は秋を垣間見ることができず、金色の鈴は雪の毛を試すようである。老いた拳で口を覆って手を叩いてはいけない。(鷹は)雲を穿ち、雷のように兎を殺す。鷹の嘴がナイフに勝るとは誰が知るだろうか。惜しむべきは飢えを忍び、寒日が暮れてから、人に向かって(鷹が)繋がれている紐を食いちぎることである。

⑧架上鷹絶句【著者は崔鉉(唐代の政治家)】=天邊の心は暗く、頭や身を案じている。(鷹は)理由なく万里と青空を飛翔することを欲している。ついに去ろうとする。誰がこの(鷹が架に繋がれている)紐を解く人を知るだろうか。

さて、右の叙述のうち、②「鷹賦」については、中国の唐代に成立した類書である『初学記』卷三十において「隋魏彦深鷹賦」として引用されている他、同じく宋代の類書である『太平御覧』「羽族部十三・鷹」「隋魏彦深鷹賦曰」として同文が記載されていることはすでに述べた。続く③「鷹體作詩」については、同詩が他文献に引用された事例を管見において確認できない。ただし、この③を除いて、②「鷹賦」と④「放鷹詩」～⑧「架上鷹絶句」の本文が併せて引用されている事例については、宋の祝穆が編集した類書『古今事文類聚』「後集卷之四十三」において確認できる。同書は唐代の類書である『芸文類聚』『初学記』の体裁にならって、古今の群書の要語や詩文を集め分類したもので、元の富大用が同書の「新集」三十六卷、「外集」十五卷、祝淵が「遺集」十五卷を追加したものという。日本でも寛文6年(1666)に京都の八尾勘兵衛久(やお・かんべいともしさ)を版元として、同書の訓読文の版本が刊行されている。

以下に『古今事文類聚』「後集卷之四十三・羽蟲部・鷹・雑著」(版元：八尾勘兵衛、寛文6

年刊)に見える該当本文を掲出する。

鷹賦

魏彦深

レノノ之化育。ニ鐘ノ之所<sup>スル</sup>生資<sup>ニ</sup>金方<sup>ノ</sup>之猛氣<sup>ニ</sup>檀<sup>ノ</sup>二火徳<sup>ノ</sup>之炎精<sup>ヲ</sup>何<sup>ノ</sup>虞<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>之<sup>トルテ</sup>多<sup>ク</sup>端<sup>ニ</sup>運<sup>ヲ</sup>二横<sup>ニ</sup>羅<sup>ヲ</sup>  
 一<sup>テ</sup>以<sup>ス</sup>羈<sup>ス</sup>束<sup>ス</sup>綴<sup>フ</sup>二輕<sup>ニ</sup>絲<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>雙<sup>ニ</sup>臉<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>結<sup>ニ</sup>二長<sup>ニ</sup>繩<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>兩<sup>ニ</sup>足<sup>ヲ</sup>一。飛<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>二於<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>情<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>食<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>充<sup>ニ</sup>二於<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>欲<sup>ニ</sup>  
 一。逸<sup>テ</sup>翰<sup>ク</sup>由<sup>ク</sup>而<sup>ク</sup>暫<sup>ク</sup>歇<sup>ク</sup>。雄<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>爲<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>自<sup>カ</sup>局<sup>ニ</sup>若<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>貌<sup>ハ</sup>非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>レ<sup>ハ</sup>。相<sup>ニ</sup>乃<sup>シ</sup>多<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>途<sup>ヲ</sup>。指<sup>シ</sup>重<sup>ニ</sup>二<sup>ヲ</sup>十<sup>ニ</sup>字<sup>ヲ</sup>一。尾<sup>ハ</sup>  
 貴<sup>フ</sup>二<sup>ヲ</sup>舍<sup>ニ</sup>蘆<sup>ヲ</sup>一。立<sup>ツ</sup>如<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>植<sup>ノ</sup>木<sup>ヲ</sup>一。望<sup>ム</sup>似<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>愁<sup>ニ</sup>胡<sup>ノ</sup>一<sup>ヲ</sup>鬚<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>鉤<sup>ノ</sup>利<sup>ヲ</sup>一。脚<sup>シ</sup>等<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>荊<sup>ノ</sup>枯<sup>ヲ</sup>一。亦<sup>ハ</sup>有<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>散<sup>ノ</sup>  
 花<sup>ノ</sup>一<sup>コト</sup>赤<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>中<sup>ニ</sup>點<sup>ヲ</sup>血<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>。太<sup>ク</sup>文<sup>ヲ</sup>若<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>錦<sup>ノ</sup>細<sup>シ</sup>斑<sup>ニ</sup>似<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>禰<sup>ノ</sup>。眼<sup>シ</sup>類<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>珠<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>毛<sup>ヲ</sup>猶<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>霜<sup>ノ</sup>雪<sup>ヲ</sup>一。身<sup>ハ</sup>重<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>金<sup>ノ</sup>。  
 爪<sup>コト</sup>剛<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>鐵<sup>ノ</sup>。或<sup>ハ</sup>復<sup>ク</sup>頂<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>似<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>削<sup>ク</sup>頭<sup>ニ</sup>圓<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>卵<sup>ノ</sup>。臆<sup>ク</sup>濶<sup>ク</sup>頭<sup>ク</sup>長<sup>ク</sup>。筋<sup>ク</sup>僂<sup>ク</sup>頸<sup>ク</sup>短<sup>ク</sup>翅<sup>ク</sup>厚<sup>ク</sup>羽<sup>ク</sup>勁<sup>ク</sup>。髀<sup>ク</sup>寬<sup>ク</sup>肉<sup>ク</sup>緩<sup>ク</sup>求<sup>ク</sup>  
 二<sup>ヲ</sup>之<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>俱<sup>ニ</sup>爲<sup>ク</sup>二<sup>ト</sup>絶<sup>ト</sup>伴<sup>ト</sup>一。或<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>鶉<sup>ノ</sup>頭<sup>ヲ</sup>一。或<sup>ハ</sup>似<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>鷓<sup>ノ</sup>首<sup>ヲ</sup>一。赤<sup>ク</sup>睛<sup>ク</sup>黃<sup>ク</sup>足<sup>ク</sup>。細<sup>ク</sup>骨<sup>ク</sup>小<sup>ク</sup>肘<sup>ク</sup>。懶<sup>ク</sup>而<sup>ク</sup>易<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>  
 警<sup>テ</sup>。好<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>難<sup>キ</sup>レ<sup>ハ</sup>誘<sup>テ</sup>。住<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>フ</sup>レ<sup>ハ</sup>呼<sup>フ</sup>。飛<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>走<sup>ル</sup>。若<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>斯<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>輩<sup>ハ</sup>。不<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>勿<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>有<sup>ク</sup>若<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>夫<sup>ノ</sup>疾<sup>ク</sup>食<sup>ク</sup>速<sup>ニ</sup>  
 消<sup>スル</sup>。此<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>有<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>命<sup>ヲ</sup>。鴛<sup>ノ</sup>頸<sup>ク</sup>猴<sup>ク</sup>立<sup>ツ</sup>。是<sup>ハ</sup>爲<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>無<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>病<sup>ヲ</sup>。廁<sup>ノ</sup>門<sup>ク</sup>忌<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>大<sup>ク</sup>。結<sup>ク</sup>腹<sup>ク</sup>惡<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>軟<sup>ク</sup>。條<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>欲<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>絶<sup>ト</sup>。背<sup>ハ</sup>  
 不<sup>レ</sup>宜<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>喘<sup>ク</sup>生<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>窟<sup>ニ</sup>一<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>好<sup>ク</sup>眠<sup>ク</sup>巢<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup>一<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>常<sup>ク</sup>立<sup>ツ</sup>雙<sup>ク</sup>髀<sup>ク</sup>長<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>起<sup>ツ</sup>遲<sup>ク</sup>。六<sup>キ</sup>翻<sup>ク</sup>短<sup>ク</sup>者<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>飛<sup>ツ</sup>急<sup>ク</sup>  
 毛<sup>ク</sup>衣<sup>ク</sup>改<sup>ク</sup>厥<sup>ク</sup>色<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>常<sup>ト</sup>。寅<sup>ニ</sup>生<sup>ク</sup>酉<sup>ニ</sup>就<sup>ク</sup>總<sup>ク</sup>號<sup>ク</sup>爲<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>黃<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>周<sup>ノ</sup>作<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>鷓<sup>ノ</sup>千<sup>ニ</sup>日<sup>ノ</sup>成<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>蒼<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>排<sup>ト</sup>蘆<sup>ノ</sup>。性<sup>ハ</sup>殊<sup>ナリ</sup>  
 二<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>鳥<sup>ヲ</sup>一。雌<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>體<sup>ク</sup>大<sup>ク</sup>。雄<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>形<sup>ク</sup>小<sup>ク</sup>。遇<sup>ル</sup>レ<sup>ハ</sup>犬<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>驚<sup>ク</sup>猜<sup>ク</sup>。得<sup>ル</sup>レ<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>馴<sup>ク</sup>擾<sup>ク</sup>養<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>雛<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>病<sup>ヲ</sup>。野<sup>ハ</sup>羅<sup>ハ</sup>則<sup>ク</sup>  
 多<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>巧<sup>ク</sup>察<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>爲<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>易<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>調<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>實<sup>ク</sup>難<sup>ク</sup>。格<sup>ハ</sup>必<sup>ク</sup>高<sup>ク</sup>迥<sup>ク</sup>。室<sup>ハ</sup>必<sup>ク</sup>華<sup>ク</sup>寬<sup>ク</sup>薑<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>取<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>熱<sup>ク</sup>。酒<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>排<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>寒<sup>ク</sup>。鞞<sup>ハ</sup>須<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>  
 温<sup>ナル</sup>暖<sup>ハ</sup>一。肉<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>二<sup>ニ</sup>陳<sup>ニ</sup>乾<sup>ト</sup>一。近<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>レ<sup>ハ</sup>令<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>狎<sup>ク</sup>。靜<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>使<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>安<sup>ク</sup>。晝<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>離<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>手<sup>ヲ</sup>。夜<sup>ハ</sup>便<sup>ク</sup>火<sup>ク</sup>宿<sup>ク</sup>。微<sup>シテ</sup>  
 加<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>毛<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>少<sup>ク</sup>減<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>肉<sup>ヲ</sup>一<sup>ヲ</sup>肌<sup>ハ</sup>肥<sup>ク</sup>腸<sup>ハ</sup>瘦<sup>ク</sup>。心<sup>ハ</sup>和<sup>ク</sup>性<sup>ハ</sup>熟<sup>ク</sup>。今<sup>ハ</sup>絶<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>雲<sup>ノ</sup>霄<sup>ヲ</sup>一。志<sup>ハ</sup>在<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>馳<sup>ニ</sup>遂<sup>ト</sup>一

雙白鷹贊

蘇延頁

(中略)

義鷹記

呂次儒南公

(中略)

放鷹

白居易

十月鷹出<sup>ツ</sup>レ<sup>ハ</sup>籠<sup>ヨリ</sup>草<sup>レ</sup>枯<sup>ク</sup>雉<sup>タリ</sup>兔<sup>テ</sup>肥<sup>フ</sup>。下<sup>ニ</sup>レ<sup>ハ</sup>鞞<sup>ニ</sup>隨<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>指<sup>ニ</sup>顧<sup>ト</sup>一。百<sup>シ</sup>擲<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>二<sup>ノ</sup>一<sup>ヲ</sup>遺<sup>ト</sup>一。鷹<sup>ハ</sup>翅<sup>ク</sup>疾<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>レ<sup>ハ</sup>風<sup>ノ</sup>。鷹<sup>ハ</sup>爪<sup>ク</sup>利

如<sup>シ</sup>錐<sup>コト</sup>。本爲<sup>ト</sup>鳥<sup>ノ</sup>所<sup>ル</sup>設<sup>レ</sup>。今爲<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>ル</sup>資<sup>レ</sup>孰<sup>カ</sup>能<sup>ク</sup>使<sup>ス</sup>二<sup>然</sup>一<sup>ニ</sup>。有<sup>レ</sup>術<sup>シ</sup>甚<sup>リ</sup>易<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>。取<sup>ク</sup>二<sup>其</sup>向<sup>ノ</sup>背<sup>ノ</sup>  
 性<sup>一</sup>。制<sup>レ</sup>在<sup>二</sup>飢<sup>ニ</sup>飽<sup>ト</sup>時<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>使<sup>ス</sup>二<sup>長</sup>一<sup>ニ</sup>飽<sup>ト</sup>。不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>使<sup>ス</sup>二<sup>長</sup>一<sup>ニ</sup>飢<sup>ト</sup>。飢<sup>ル</sup>則<sup>テ</sup>力<sup>ハ</sup>不<sup>ク</sup>足<sup>ル</sup>。飽<sup>ル</sup>則<sup>テ</sup>  
 背<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>飛<sup>ブ</sup>。乘<sup>メ</sup>飢<sup>ニ</sup>縱<sup>ニ</sup>搏<sup>ニ</sup>擊<sup>ス</sup>一<sup>ニ</sup>。未<sup>レ</sup>飽<sup>ク</sup>須<sup>ス</sup>二<sup>繫</sup>維<sup>一</sup>所以<sup>ニ</sup>爪<sup>ノ</sup>趨<sup>ク</sup>功<sup>ト</sup>。而<sup>人</sup>坐<sup>ニ</sup>收<sup>ル</sup>之<sup>ト</sup>。聖<sup>明</sup>馭<sup>ス</sup>二<sup>英</sup>  
 雄<sup>一</sup>其<sup>術</sup>亦<sup>如</sup>斯<sup>ニ</sup>。鄙<sup>語</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>棄<sup>ス</sup>。吾<sup>聞</sup>二<sup>諸</sup>獵<sup>師</sup>一

養<sup>フ</sup>鷹<sup>詩</sup>

劉禹錫

養<sup>ハ</sup>鷹<sup>非</sup>玩<sup>フニ</sup>形<sup>ヲ</sup>所<sup>ル</sup>資<sup>ノ</sup>擊<sup>ノ</sup>鮮<sup>ナリ</sup>力<sup>メ</sup>。少<sup>メ</sup>年<sup>ノ</sup>味<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>理<sup>一</sup>。日<sup>ソ</sup>日<sup>メ</sup>哺<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>息<sup>ヲ</sup>探<sup>レ</sup>雛<sup>ヲ</sup>網<sup>ス</sup>二<sup>黃</sup>一<sup>ニ</sup>口<sup>一</sup>。且<sup>暮</sup>  
 有<sup>二</sup>餘<sup>一</sup>食<sup>一</sup>。寧<sup>シ</sup>知<sup>下</sup>鞞<sup>ナル</sup>時<sup>ヲ</sup>。翅<sup>メ</sup>重<sup>ク</sup>飛<sup>不</sup>得<sup>ル</sup>。毛<sup>音</sup>羶<sup>上</sup>林<sup>表</sup>。狡<sup>兔</sup>自<sup>南</sup>北<sup>ニ</sup>。飲<sup>啄</sup>既<sup>已</sup>盈<sup>ス</sup>。

安<sup>ソ</sup>能<sup>ク</sup>勞<sup>セン</sup>三<sup>羽</sup>翼<sup>一</sup>

王<sup>兵</sup>馬<sup>使</sup>二<sup>角</sup>鷹<sup>一</sup>

杜甫

(中略)

籠<sup>ノ</sup>鷹<sup>詞</sup>

柳宗元

(中略)

籠<sup>ノ</sup>鷹<sup>詞</sup>

張文潛

(中略)

放<sup>フ</sup>鷹

李白

(中略)

畫<sup>ノ</sup>鷹

杜甫

素<sup>風</sup>練<sup>霜</sup>起<sup>ル</sup>。蒼<sup>鷹</sup>畫<sup>メ</sup>作<sup>殊</sup>攫<sup>メ</sup>身<sup>ヲ</sup>思<sup>フ</sup>二<sup>狡</sup>兔<sup>一</sup>側<sup>ヲ</sup>似<sup>テ</sup>愁<sup>ニ</sup>胡<sup>一</sup>。條<sup>鏃</sup>光<sup>堪</sup>レ<sup>ニ</sup>適<sup>ク</sup>軒<sup>ニ</sup>楹<sup>ニ</sup>勢<sup>イ</sup>可<sup>シ</sup>  
 呼<sup>ツ</sup>。何<sup>ソ</sup>當<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>擊<sup>テ</sup>二<sup>凡</sup>鳥<sup>一</sup>。毛<sup>血</sup>酒<sup>上</sup>レ<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>燕

架<sup>ノ</sup>上<sup>鷹</sup>

崔鉉

魏<sup>カ</sup>公<sup>ナリ</sup>鉉<sup>シ</sup>。元<sup>略</sup>之<sup>子</sup>也。爲<sup>レ</sup>兒<sup>時</sup>隨<sup>テ</sup>父<sup>ヲ</sup>訪<sup>ニ</sup>二<sup>韓</sup>晉<sup>一</sup>公<sup>混</sup>一<sup>混</sup>指<sup>テ</sup>二<sup>架</sup>上<sup>一</sup>鷹<sup>令</sup>レ<sup>ニ</sup>詠<sup>ク</sup>焉<sup>混</sup>曰<sup>ク</sup>。此  
 兒<sup>シ</sup>可<sup>シ</sup>謂<sup>ツ</sup>前<sup>程</sup>萬<sup>里</sup>也<sup>後</sup>登<sup>第</sup>。久<sup>ク</sup>居<sup>ニ</sup>二<sup>廊</sup>廟<sup>一</sup>

三<sup>ヒ</sup>擁<sup>一</sup>節<sup>ヲ</sup>尾<sup>一</sup>

天<sup>ノ</sup>邊<sup>心</sup>膽<sup>案</sup>頭<sup>身</sup>。欲<sup>メ</sup>擬<sup>セント</sup>二<sup>飛</sup>騰<sup>一</sup>未<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>レ<sup>ニ</sup>因<sup>シ</sup>。萬<sup>里</sup>碧<sup>霄</sup>終<sup>ニ</sup>一<sup>去</sup>。不<sup>レ</sup>知<sup>ク</sup>誰<sup>ハ</sup>解<sup>ク</sup>レ<sup>ニ</sup>條<sup>ヲ</sup>人

鷹

章孝標

星<sup>眸</sup>未<sup>レ</sup>放<sup>ル</sup>瞥<sup>ヲ</sup>二<sup>秋</sup>毫<sup>一</sup>頻<sup>掣</sup>二<sup>金</sup>鈴<sup>一</sup>試<sup>ム</sup>二<sup>雪</sup>毛<sup>一</sup>。會<sup>ク</sup>使<sup>ス</sup>三<sup>レ</sup>老<sup>拳</sup>供<sup>ニ</sup>二<sup>口</sup>腹<sup>一</sup>莫<sup>レ</sup>辭<sup>ク</sup>親<sup>手</sup>啖<sup>ス</sup>

二腥臊一。穿<sup>テ</sup>雲自恠<sup>ヲ</sup>身如<sup>レ</sup>電殺<sup>テ</sup>兎誰知<sup>テ</sup>吻勝<sup>レ</sup>刀。可<sup>レ</sup>惜忍<sup>レ</sup>飢寒<sup>ヲ</sup>日暮向<sup>レ</sup>人啄<sup>ニ</sup>斷  
碧絲條

白鷹

劉禹錫

(中略)

以上のように『古今事文類聚』「後集卷之四十三・羽蟲部・鷹・雜著」(版元：八尾勘兵衛、寛文6年刊)の記述は、前掲の韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)に記載されている本文をほぼ忠実に訓読文にしている。両書における大きな相違点は、まず、右掲『古今事文類聚』「架上鷹」の本文には、崔鉉の詩に前書きが付されているが、当該本文に対応する前掲の韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)「架上鷹絶句」には、詩の前書き部分が記載されていない。さらに、『古今事文類聚』には、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)には記載されていない鷹詩も掲載されている。以下に両書の該当項目を比較した表を示す。

韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)	『古今事文類聚』「後集卷之四十三・羽蟲部・鷹・雜著」(版元：八尾勘兵衛、寛文6年刊)
(1)鷹賦	(1)鷹賦
無し	(2)雙白鷹贊
無し	(3)養鷹記
(2)鷹體作詩	無し
(3)放鷹詩	(4)放鷹※白居易の詩
(4)養鷹詩	(5)養鷹詞
無し	(6)王兵馬使二角鷹
無し	(7)籠鷹詞※柳宗元の詩
無し	(8)籠鷹詞※張文潜の詩
無し	(9)放鷹※李白の詩
(5)畫鷹詩	(10)畫鷹
(6)詠鷹詩	(12)鷹
無し	(13)白鷹
(7)架上鷹絶句	(11)架上鷹

※ ( )内の算数字は書物内での記事の順番を表す。なお、同じ題の詩については区別をするために著者の名前を※で示した。

その他にも、上掲の表から確認できるように、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(古7532-1)では、先に章孝標の鷹詩が記載され、その後に崔鉉の鷹詩が配置されているが、『古今事文類聚』ではその順番が逆になっている。

以上のようにいくつかの異同は確認できるものの、韓国国立中央図書館所蔵『鷹鵠方』(=『高麗古本鷹鵠方』)に引用されている鷹賦および鷹詩の多くは、『古今事文類聚』に掲載されているそれと重なるものである。すなわち、鷹賦から鷹詩を連続して掲載する『高麗古本鷹鵠方』はこういった中国の類書に倣った体裁であることが窺われる。しかもその類書は日本でも版本として刊行されているもので、同国において馴染み深いテキストでもあった。1930年代に多田正知が『高麗古本鷹鵠方』に関心を寄せたのも、このような中国の類書への興味と軌を一にするものであろう。

## 5. おわりに

以上において、近代における韓国と日本の放鷹文化交流の希少な事例として、『高麗古本鷹鵠方』の存在について注目し、同書の本文に見える特徴についての分析を進めてきた。その結果、同書には中国の類書である『古今事文類聚』に倣った記載が確認できるテキストであることが確認できた。同書は日本でも近世期に訓読文にした版本が刊行される等、近代における日本の知識人にとってなじみ深いものである。

そもそも『高麗古本鷹鵠方』の奥書に見える情報からその伝来をたどると、まずは李王朝時代の歴史学者である安鼎福の家に所蔵されていたものが近代になると朝鮮総督府書庫に所蔵先が移され、さらには朝鮮史編纂委員会・朝鮮史編修会の委員を務めた李秉韶がそれを1930年に書写している。このことから、『高麗古本鷹鵠方』は、前近代~近代の朝鮮半島において、鷹狩りの実用書というよりも、知識人たちの興味を惹く教養書として扱われていたことが窺えよう。また、その李秉韶に同書の謄写を希望した在朝日本人の多田正知もまた知識人であり、朝鮮文学の研究者であった。なお、多田の朝鮮文学に関する見解はその遡源を漢文学に求めるもの<sup>13)</sup>であったことから、日本人になじみ深い中国の類書に準じた『高麗古本鷹鵠方』に関心を寄せたのは妥当と言えよう。

以上のように、近代における放鷹を介した韓国と日本の文化交流は、中国の類書への学

13) 多田正知(1930)「高麗朝漢文學史(上)」『朝鮮』第181~第183等。

問的な関心に端を発するものであったことが確認できた。このように鷹狩りそのものからかけ離れた両国間の交渉の実像は、前近代から続く朝鮮半島と日本の放鷹文化交流史においてきわめて異例と言え、特筆に値するものであろう。

## 【参考文献】

- 宮内省式部職編(1931初版、2010新装復刻)『放鷹』吉川弘文館  
三木栄(1956)『朝鮮医書誌』学術図書刊行会  
田川孝三(1964初版、1973新装復刻)『李王朝貢納制の研究』東洋文庫刊  
田代和生(1999)『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』慶應義塾大学出版会  
二本松泰子(2012)『中世鷹書の文化伝承』三弥井書店  
\_\_\_\_\_(2018)『鷹書と鷹術流派の系譜』三弥井書店  
三保忠夫(2016)『鷹書の研究-宮内庁書陵部蔵本を中心に(上冊)(下冊)』和泉書院

---

논문투고일 : 2021년 12월 24일  
심사개시일 : 2022년 01월 16일  
1차 수정일 : 2022년 02월 14일  
2차 수정일 : 2022년 02월 18일  
게재확정일 : 2022년 02월 22일

---

## 近代における韓国と日本の放鷹を介した文化交流

— 『高麗古本鷹鵠方』を手掛かりにして —

二本松泰子

朝鮮半島では、前近代において三種類の鷹狩りの書物が成立していた。そのうち、二種類は前近代の日本国内で相当数の伝本が流布した。一方の『高麗古本鷹鵠方』と称するテキストは前近代の日本ではまったく受容されなかった。しかし、近代(1930年頃)になると、打って変わってこの『高麗古本鷹鵠方』のみ、在朝日本人が関心を寄せるようになる。それは、前近代において日本国内で積極的に受容された他の二種類の鷹の書物が、近代になると一切日本人の興味を惹かなくなる現象と対照的である。

本稿では、近代においてこのような現象を引き起こした『高麗古本鷹鵠方』という書物に注目し、その内容を分析した。当時、在朝日本人の関心を惹いたこの書物は、近代における韓国と日本の放鷹を介した文化交流の実態を象徴する重要な事例である。同書の特徴を明らかにすることは、両国の放鷹文化交流史の体系を構築するために必要な基礎情報であろう。

分析の結果、『高麗古本鷹鵠方』は『古今事文類聚』という、前近代において日本でも広く流布した中国の類書(一種の百科事典的な資料集)に倣った内容となっていることを確認した。このことから、近代における放鷹を介した韓国と日本の文化交流は、中国の類書への学問的な関心に端を発する知的教養レベルでの現象であることが判明した。

## Cultural Exchange between South Korea and Japan through Falconry in Modern Times Using *Koraikohonyokotsuho* as a Clue

*Yasuko, Nihonmatsu*

In the Korean Peninsula, three types of falconry books were established in the premodern period, of which two were introduced to Japan in premodern times. The book that did not come to Japan was a text called *Koraikohonyokotsuho*. However, a change happened in the modern era (around 1930), and the Japanese in Korea began to be interested in *Koraikohonyokotsuho* only. The other two types of falconry books no longer attract the interest of the Japanese in the modern period.

This paper focuses on *Koraikohonyokotsuho*, which caused a phenomenon in the modern era, and analyzes its content. *Koraikohonyokotsuho* is an important example that symbolizes the actual state of cultural exchange between Korea and Japan through falconry in the modern era. A clarification of the characteristics of this book may be necessary information for constructing a system of the history of falconry cultural exchange between the two countries.

The analysis confirms that *Koraikohonyokotsuho* is based on *Kokonjibunruiju* (an encyclopedic book of China, which was popular in Japan in the premodern period). Finally, it was found that the cultural exchange between Korea and Japan through falconry in the modern era was an intellectual, educational phenomenon that originated from an academic interest in Chinese books.